

藤村における農村回帰の志向性

— 明治四十年代の動向を中心として —

瓜 生 清

はじめに

大正十一年八月、藤村は長男楠雄を郷里馬籠へ農事見習いのため帰農させ、続いて大正十五年五月、次男鶏二に同地で半農半画家の活動を開始させる。この一連の決断には、明治三十二年四月からあしかけ七年に及ぶ小諸での生活から得た決定的な確信を伝達するために、子供たちに身を持って体験させようとした教化的意図が窺える。つまり、藤村は、故郷の大地に根を下ろして自然の本源的な生命と交感する実践的活動が、子供達の内部をより強く更生させる契機になると考える経験論を信奉していたのである。人間の存立基盤を大地に求める農本主義的思想は、自作農として自立する長男を督励する根本要因になったばかりではない。人間の活力を消耗させられていく都市生活者が直面する問題について、農村に視座を据えて警鐘を鳴らす文明批評家

の確立にも関与していたのである。このような確信に立った藤村は、エッセイ「都会」（原題「都会と地方人」、「上毛新聞」大13・12・17）小説「嵐」（「改造」大15・9）等において、都市居住者の生の枯渇を憂慮する文明批評的な提言を繰り返して倦まなかったのである。

藤村が農村や農民への拘泥を基盤にした農本主義的思想からしきりに都市文明の弱点について言及したことについては、かつて小説「嵐」に思想的に熟成されていく道程として考察したことがある¹⁾。そのとき、問題の核心に切り込んだ示唆深い先行研究として参照したのが、松永伍一『日本農民詩史』²⁾であった。松永氏は、藤村のエッセイ「農民のために」（「アルス新聞」大14・2・20）等を使って、藤村が「地方人の気魄と野性」を強調する時、それは「反都会主義という一面的な問題提起」ではなく、「ひとりの田舎者の自尊」を保とうとする「存在証明」が懸けられてい

たと論じている。私見によれば、松永氏の論は、藤村の農民性を正面から論じようとした先見的な業績として評価されなければならないと思う。

このような農民への強い関心、そこに自己の「存在証明」を懸けようとする意思は、唐突に生まれた訳ではあるまい。また、農村に視点を置き、都市文明の行方について提言する批評活動に、藤村独自の思想性が認められるとするならば、そのような思想に到達する思索の過程を検討することが必要であろう。前記の拙論では、大正期の農村回帰の志向性について論じるのを主眼としたため、そこに到る軌跡については言及が及ばなかった。本論では、それを明確にするために、時間を遡行しながら明治四十年代を中心にして検討する。

(一)

藤村は、生涯に亘つて農村に対する親近感を繰り返して表明した異例な作家である。例えば、岡山県和気郡から上京した正宗白鳥が、出身郷土についての嫌悪感を「田舎を神聖視するは机上の空論である。」(「田舎」)、「読売新聞」明37・12・9)とにべもなく吐き棄てた例や、江戸牛込に生まれた夏目漱石が、長塚節の長編『土』(春陽堂 明45・5)の序文『土』に就て」において「斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠から

ぬ田舎に住んで居るといふ悲惨な事実」に激しい衝撃を受けた場合などは、藤村との違いを如実に示す事例である。

本論で藤村について取り上げる同時期に当たりますが、明治四十年二月、トルストイに倣って東京郊外の北多摩郡千歳村に退隠した徳富蘆花が、村民と一線を画し唯我的ないわゆる「美的百姓」(『みづのたはこと』新橋堂・服部書店・警醒社 大2・3)を実践した例と比べて見ても、藤村が、中央の文壇で活動を続けながら農村との心理的一体感をこゝとさらに強調した作家であった印象を禁じえないのである。藤村は、明治四十年代、農村が与えた感化の深さについて、「教師」として赴任し「生徒」として帰ったと自己規定した短編集『緑葉集』(春陽堂 明40・1)の「序」や、この序文の自己規定の箇所を冒頭に引用し、末尾において「私は小諸に居た時と同じやうな田舎生活を送りつゝある。」と首尾を呼応させたエッセイ「浅間の麓」(『信濃毎日新聞』明42・5・19)などで、強く言及しつづけているのである。なお、「浅間の麓」は筑摩書房版『藤村全集』第六卷(昭和42・4)では初出未詳となっているが、発表紙等は上記のとおりである。

後年のことであるが、藤村は『父と子』への回答「(『読売新聞』大14・7・8)の中で、長男に帰農を促した真意に関連させて「私の気持の中に百姓になつてもいいといふやうな一部がある」と語ったことがある。藤村の農村

への志向性は、社会から超然とする隠逸趣味とは異質であり、小諸時代の体験に根ざした強い実行への衝迫を秘めたものであったことが注目されるのである。しかしながら、農村への傾倒が藤村の批評精神の形成にどのように関係しているのか、その結果どのような独自の文明批評にまで発展していったかという点で、十分な説明がなされているとは言いがたい。明治四十年代の動向に絞っても、談話「江戸趣味と田舎趣味」(『学生タイムス』明40・2)小説「並木」(『文芸倶楽部』明40・6)エッセイ「歓楽の時、活動の時」(『中学世界』明42・8。のち感想集『新片町より』所収、佐久良書房・明42・9)などにおいて、藤村が、日本の近代化の問題が集中的に発現した都市に生きる居住者が直面する問題について、たえず農村と比較しながら対処の方法を考え続けたことを再検討することが求められているのである。

藤村は、大正十年八月一日小諸で講演を行っている。小諸時代を回顧した講演の内容は、雑誌「信州」(第三巻第十号 大10・10)に「浅間の裾野」と題して掲載されている。なお、目次では「浅間山の麓」となっている。これによると「小諸へ来てはじめて家を持ち、父にもなつて、生活してゐるうちに、田舎者の意識が湧くやうに起つて来た、これからは田舎者として都会へ踏み出して行かうと思つたのは、小諸へ来てからです」と語ったと伝えられている。

この講演内容は、かつて叙情詩時代に書かれた紀行文「木曾谿日記」(『文学界』明30・10、31・1)において、「文芸にこゝろをさすものの故郷」であると熱烈に賛美した東京と、出自の地である木曾馬籠への二元的な愛着心を表明していた藤村が、小諸移住以降、「田舎者の意識」から都会を批評する主張者へ変わったことを示している。勿論、藤村の校閲を経ていない第三者の聞き書きを妄信し、小諸在住時代に地方人意識を持って中央文壇に進出しようとした明確な意思が誕生していたと速断することは慎まなければならない。しかし、そのことは、以下のような神津猛に宛てた書簡によって、もはや疑うべくもないのである。東京市浅草区新片町に転居した直後の明治三十九年十月十六日付神津猛宛書簡で「大久保の片田舎より、かゝる黄塵のうちに身を投じたれば、あまりの突然に驚かれしも尤と存候。小生は京に田舎ありの主義を守り、いづこに行くも田舎生活に満足し、簡素にしてこと足るやう心懸け居候。」と、所信を明確に伝えているからである。この書簡と、小諸の講演で語った「田舎者の意識」を持って都会に進出するという明確な気概の表明は、完全に照応しあっているのである。雌伏の地小諸を客体化する時間的空間的な距離が成立した上京後、かつての生活体験が都会を批評する明確な価値判断を持った理念にまで高められた経過があったことは動かし難いのである。以下、小諸から東京府豊多摩郡西大久保

へ、そして市中の浅草区新片町へ移り住んだ生活歴の持つ意味を検討し、それと並行して田舎と都市を対比する問題意識が発展していった過程について、資料に即しながら考察する。

明治三十八年四月二十九日、一家を挙げて西大久保へ転居する。上京前に小山内薫に新居の幹旋を依頼した書簡（明38・3・8）によると、選定に当たって出された要望は、不特定の「場末」を指示した「漠たる注文」であった。用意周到に意思的に人生を切り開いてきた藤村であるが、西大久保への移転は、出版費用は言うに及ばず、生計費も借用しなければならなかった経済的事情を最優先した決定であった。西大久保は、文字通り『破戒』（明39・3）完成のための借り住まいに過ぎず、居住地に固執する意識は希薄であったのである。短編「芽生」（『中央公論』明42・10）小説『家』（明44・11）下巻第一章の叙述によると、西大久保に在住する一年半程の期間に、郊外の田園風景がまたたくまに借家の立ち並ぶ新開地に変貌する様子が書かれている。しかし、西大久保在住時代に書かれた文章を調べても、津金良助宛書簡（明38・8・15）に「大久保は田舎です」とある程度で、都市の人口の膨張が、東京十五区外の周縁部に当たる西大久保にまで押し寄せている市街地化の問題について明確な言及がみられない。浅草へ転居した直後の前記神津猛宛書簡や「寒き口唇（予の『文学談』

に就いて）」（『読売新聞』明39・10・27。以下、「寒き口唇」と略記する）に、「大久保の片田舎」とはっきりと記していることから見ても、都市化に呑み込まれていく東京郊外の変容について明確に整理された小説「芽生」「家」等の認識は、後年の執筆時の考えであって、西大久保在住時代には不明確であったのではないか。このことは後述するが、浅草区新片町に転居した以降にはっきりしてきた考えであったと思う。

藤村は、出世作『破戒』の代償のようにして三女を失った自責の地西大久保から、明治三十九年十月二日に浅草区新片町に転居する。神津猛宛書簡（明39・10・16）に「牛込本郷辺を所々尋ねた」とあるように、当初、移転先を友人田山花袋の住んでいた牛込区や、いわゆる本郷文化圏等の山の手の高台に物色していた。浅草への転居は、特別の思惑があったのではなかったであろう。新片町は、隅田川に合流する神田川口の通称柳橋の附近に位置する。東京市編纂『東京案内』（明40・4）下巻によると、この柳橋周辺は、「料理店、船宿、待合貸席、芸者屋等の巢窟にして、其名烟花を以て著はる。」と説明されている。藤村は、弦歌ささめく歓楽の下町に転居したことになる。その結果、藤村の転居は、新進作家の一挙手一投足に注目していた文壇に、恰好のゴシップ種を提供することになったのである。例えば、前記神津猛宛書簡でも、下町に移り住む

ことについて「君には不調和なり」と言った友人の反応に
触れており、談話『春』と『龍土会』（「趣味」明40・4）
によると、「狭斜の風俗」を探訪するために粋な所に家を
構えたのではないか、という憶測さえ生まれたいらしい。

『破戒』によって予期以上の成功を収め、一躍ジャーナ
リズムの寵児になった藤村にとって、誘惑に満ちた中央の
文壇にどのように対峙するかという自省意識は一層堅固に
ならざるをえなかったであろう。郊外西大久保から東京の
直中に居を構え、第二の長編小説『春』（明41・10）の構
想を練り始めた藤村が、神津猛宛書簡（明39・1・5）で
「名を避け実にく就く」と戒めた初心に戻ろうと考えたこと
は想像に難くない。さらに、粋・俠・いなせなど、江戸伝
来の感受性・気質の色濃い下町に移住したことは、伝統的
文化圏を新時代の趨勢から考察する場所に身を置くことにな
った。その帰結的認識が、「田舎生活」を宣言した前記
の神津宛書簡にはかならなかった。そうすると、書簡に繰
り返される「田舎生活」の語句は、単に質実をモットーと
し、上滑りした慢心を戒める「簡素」な生活宣言の意味に
解してはなるまい。虚栄に流されやすい都会に立ち向かう
ために、意識的に選択した生活信条として押さえなければ
ならない。その意味で、小諸から東京郊外へ、そして市中
浅草区へ移り住んだ生活歴は、居住地を相互に比較する認
識の往復運動を一気に加速していくことになったのである。

(二)

「田舎生活」を標榜する生活信条が、都市文化を批評す
る思想的基盤になっていった過程は、以下のような資料の
発表経過を考察することで明らかにする。その口火を切っ
たのは、浅草区新片町に転居して間もなく発表された談話
「文学談」（「読売新聞」明39・10・22）である。新来者か
ら見た下町観や江戸文学論など話題は多岐に亘っているが、
文明を動かす中心的潮流が、下町から新興の山の手に移ろ
うとしている情勢について論評したところにポイントがあっ
たと思われる。江戸伝来の趣味・気質を色濃く残した下町
が、時代の進展から脱落しなければならない理由を、旧態
の維持に汲々としている退嬰的な保守主義に求め、伝統的
文化圏の下町を母体とする「硯友社」の文学が、文壇から
退場を余儀無くされる時代に到達したことを無遠慮に述べ
た談話になっている。しかし、この口述筆記は多くの聞き
間違いがあり、資料的価値に疑問が残るものである。慎重
居士の藤村が、驕慢な放言と受け取られるのを危惧して、
すぐさま修正の文章を発表しようとしたのも当然であった。
すでに談話「緑蔭雑話」（「読売新聞」明39・4・9）で不
本意な筆記に当惑したことのある藤村にとって、同じ轍を
踏んだことになるからである。物言えば唇寒しの思いは強
かったであろう。早速この談話筆記の不備について、七項

目に互って訂正しなおしたのが前記の「寒き口唇」である。ここでは逐条的な修正に追われ、考え方の全容を発展的に述べるに至っていない。そのため、不徹底な訂正文に終わった「寒き口唇」の真意を詳述する目的で発表された談話「江戸趣味と田舎趣味」において、ようやく考え方の骨格が整えられることになった。そして、冒頭「盆が近付いた」と書き出され、夏の時期に焦点を定めて都会と田舎が如何に対照的であるかについて論じた「飲茶の時、活動の時」において、「江戸趣味と田舎趣味」の比較論は、地方の農村から都市文化の弱点を批評する根拠をより明確に提示することになるのである。

なお、筑摩書房版『藤村全集』第六巻の「解題」によると、「江戸趣味と田舎趣味」は「飲茶の時、活動の時」の初出文に相当し、原題が改められたと記されている。しかし、これは明らかな間違いである。なぜならば、明治四十二年八月十日発行の雑誌「中学世界」第十二巻第十号に発表された「飲茶の時、活動の時」が、『新片町より』所収の同題の文章の初出文であるからである。念のために補足すると、雑誌「中学世界」と『新片町より』所収文との間にも、些少だが異同がある。なお、「江戸趣味と田舎趣味」と「飲茶の時、活動の時」の本文と読み比べると、両者間の異同は大きい。当然、両本文は、初出から定稿へという本文関係で理解すべきではない。さらに、これら一連のエッセイ

セイの論旨の流れを押さえることによって、藤村の農村へ固執する思想の発展過程を考察したい立場から言えば、「江戸趣味と田舎趣味」は、当然全集に所収される価値を持つていえると考ええる。全集の解題においては、少なくとも本文の異同が無視できないことについて、詳細な注記を行う措置が必要であつたろう。以下、「文学談」以降の資料の発表過程を反映した「江戸趣味と田舎趣味」を取り上げること、問題の多くが集約できる利点も考慮に入れて、「江戸趣味と田舎趣味」の本文を紹介しながら検討を加えたい。なお、本文の旧漢字は新字体に改め、パラルビは省略した。以下、本文に付した傍線・傍点は稿者によるもので、傍線部は、「飲茶の時、活動の時」に継承され、両本文間の論旨に変更が認められない箇所であることを示す。

① 下町の江戸趣味が極度にまで発達し尽し、山の手の田舎趣味が次第に変遷して来て、おのづから其間に『新東京』の発展しつゝあるのは、今日の光景です。

これは、いづぞや読売新聞紙上に掲げた私の意見の一つなんです、それに就いて今少し委しく私の考へを述べて見ませう。先づ、江戸趣味の特色とは何でせうか。それから話しませう。

私の考へでは、江戸趣味の特色は『センチアリズム』にある。『センチアリズム』と言つても、単に肉感的と

言つたやうな狭い意味からでは無く、鋭敏な感覚に触れて起る一種の神経質を指したのです。実に江戸人が能く聴き、能く視、能く味ふといふ力に富んで居ることは、天性に近いと言つても可い。田舎者の眼には映り難い色の淡味といふものも、江戸人は能くそれを解して居る。田舎者が聞き分け難いやうな歌詞音曲の節回しであるとか、訛りのない言葉遣ひであるとかも、江戸人の耳は能くそれを聞き分ける。田舎者の舌は草深主義の方ですが、江戸人の口は量よりは質をと言つたやうな風で遙かにこまかい、複雑な味でなければ満足しません。平素着るものも、田舎はこつ／＼した地織で済む、江戸は瀟洒とした唐棧でせう。斯ういふ風に考へると、江戸人の感覚は非常に発達して居て、優美であると同時に又た極めて鋭敏であることが解りますね。『意気』とか、『いなせ』とか、すべて江戸人が好んで用ふる言葉の意味は、この『センシユアリズム』を形容したものではありませんまいか。思ふに、斯ういふ発達した感覚は、大都会の生活が知らず識らずの間に養成したもので、過ぐる二三世紀の間の長い修養を経て、『粹』といふ域にまで達したものでせう。

しかしこの江戸趣味は既にもう極度にまで発達し尽したもので、歌舞伎に、音曲に、踊に、または落語講釈に、多くの形式を産出しました。『センシユアリズム』の極は、耐久奮闘の力に乏しくなつて、偉大な『江戸』精神の発揚

を見るものが少くなつたやうに思はれます。所謂通人なるものは、一種の美的生活を送る、懶惰な天才であります。彼等の『センシユアリズム』も次第に型に入つて来たやうです。彼等の弁舌は機知と嘲罵とに富み、彼等の神経質は華麗と誇大とを兼ねて居る。たゞ彼等は深い洞察の力を缺いた。また彼等は生活といふものゝ真面目な意味を考へずに居る。そこで生存競争の烈しい世の中では、野暮な田舎趣味も必要になつて来ます。近頃は『簡易生活』などといふ声をしきりに耳にするやうになりました。

一概に田舎と言ひますけれども、私は矢張田舎を二通りに分けて、付属的の田舎と、独立したものと、斯う考へて見たい。付属的の田舎とは都会の周囲に散在する地方で、万事都会の勢力の下にあつて、恰も都会に付属するかの如き観あるものを言つたのですが、独立した田舎は丁度其反対に、単独の発達を遂げた地方です。単独の発達を遂げるには、それ／＼の歴史、地勢、農産業の発達物貨の集散、其他政事上経済上の事情によつて、人物も必要であるし、経営も大切であるし、それから独立した地方の精神といふものが無ければなりません。随つて地方的特色と言つたやうなものは、都会に付属した田舎よりは、独立した地方に濃ひ沢なんです。

長く都会の生活に慣れて田舎と言へば一概に輕蔑するやうな人々は、たゞ都会に付属した地方のみを見て田舎とい

ふものは皆な斯様なものだ」と速断して居るのではありますまいか。然し、意味も無く田舎を輕蔑するやうな時代は最早過ぎ去りました。

都會の空氣が懶惰になり易いの引きかへ、一般に田舎の人々が能く働くといふことは注意すべき現象と言はねばなりません。殊に田舎の婦女子が能く働くことは、都會に居るものゝ想像も及ばぬ程です。能く働くから、随つて氣象も剛健である、性質も自然である、と言つたやうなものだらうと思ふんです。何故田舎の人々が能く働くかと言ふに、彼等は都會の人々よりも一層自然に接近して居ます。彼等は直接に自然から生活材料を受取つて居ます。ですから勢ひ働かずには居られません。

斯う考へると、江戸趣味は『味ふ』といふことを教へる場合が多く、田舎趣味は『生きる』といふことを考へさせる場合が多い。自然と戦つて、生活といふものゝ意味を汲取る点に、田舎趣味の特色があるのでせう。

今日の東京は実に激しく動揺して居る都會です。市区改正の實行、明治式建築物の増加、電車に伴ふ市街の盛衰、其他女子の活動と風俗の変遷等を眺めたばかりでも、多感な江戸趣味と、剛健な田舎趣味と、それから清新な西洋趣味とが、いかに混雜して居るかといふことを思はせます。

この大混雜と大動揺は、やがて『新東京』——亜細亞に於ける近代の文明の中心——日本の理想の大都會を建設しな

ければ休まないものでせう。まあ、私はそれを熱望して居る一人であります。

傍線部について「欽楽の時、活動の時」と詳細に比較すると、「江戸人」が「都會の人」へ、「センシユアリズム」が「感覺主義」「感覺の發達した」に修正され、その他、談話体が全て説明体に改められており、本文の位置も差し替えられるなど異同の箇所は少なくない。しかし、傍線部の要点に関しては、論旨に変更はなかったと判断される。

最初に傍点部①について事実關係を確認すると、これは「読売新聞」に發表された訂正文「寒き口唇」の第二項目を引用したものである。これによって「江戸趣味と田舎趣味」を口述する目的が、「寒き口唇」で意を尽くさなかった趣旨の不徹底を解消しようとしたものであったことが分かる。「寒き口唇」では、傍点部①の引用文に續けて「予が東京を火事場に譬へた」主意は、「時代の精神もしくは好尚にあつた。」と念押ししていた。それを受けた「江戸趣味と田舎趣味」は、江戸伝来の伝統文化を保守する下町に対して、新興の文学をリードする地方出身の文学者・知識人が多く住んだ山の手を対比し、二つの異質な文化圏の葛藤から、激しい変化の最中にある「新東京」を動かす時代精神の行方を見定めようとした都市文化論であつたと言えるのである。小木新造⁵氏が指摘しているように、江戸時

代ほとんど諸大名や旗本などの武家屋敷と寺院で占められていた山の手は、明治維新の政変後、官有地となった大名屋敷等は官庁・大学・陸軍の用地に供されていった。それ以外の三百万坪の武家地の三分の一を占める百二万余坪が、明治二年、生糸・茶の輸出をもくろんだ政策（桑茶令）によって、広大な田園風景に一変させられた。無定見で場当りの政策であった桑茶令は、明治四年すぐさま撤回となったが、蒲原有明が「少年時」（『飛雲抄』所収、書物展望社 昭14・7）において、「実際その頃の東京の山手は、草深い田舎であつたと云つてよい。下町の女子供は狐が出るといつて泊りにも来なかつた。」と回想しているとおり、明治二十年以前の山の手は衰微を極め、荒廃の気配が著しかったのである。その後、山の手と下町は、再編成される明治社会の新たな階層意識を反映する空間になっていく。たとえば、明治生命保険相互会社の創立者を父として誕生した阿部省三（水上瀧太郎）の処女作「山の手の子」（『三田文学』明44・7）は、明治二十年代の半ば、農地転用を免れた山の手の高台の屋敷町に生まれた主人公が、坂下に隣接する町家の子との淡い交情と疎外の悲哀について回想した作品である。小説「山の手の子」にくりかえされる坂の上と坂下の地勢の関係が、すでに両者の意識・生活の全てが隔絶した関係にあることを象徴しているのである。また、主人公に「御屋敷の子」は父に倣って「偉い人」にな

るためには、「卑しい町の子」と遊んではならないと禁じた母の戒めが、歴然とした社会階層意識の進行を証拠でているのである。山の手に広がった広大な田園風景は、前記の小木新造論文が指摘するように東京の人口の膨張とともに、「明治後半には、山の手は官員および勤め人の集住地」となり、下町に対して「身分階層概念を含む言葉としての意味合い」を強めていったのである。山の手の高台が、明治後半、地方から流入し新たに都市文化を担う文学者・知識人の居住地となり、江戸開府以来培われてきた洒脱・意気を愛好する江戸っ子氣質を誇示する下町に対して、いわゆる山の手文化圏として異質な発展をしてきたことは説明を要しない。こうした歴史的変遷を視野に入れて「下町の江戸趣味」と「山の手の家趣味」を対比する文化論は、下町が「硯友社」の文学の母体であるならば、山の手はそれに代わろうとする新興の文学の拠点という新旧の構図を投影させた図式化と考えるとよからう。

「寒き口唇」は漠然とした文化情勢論の域に止まっていた。「江戸趣味と田舎趣味」は、時代精神の動向を見定めようとしていた藤村が、いまだ強い命脈を保ち続けている江戸伝来の伝統文化について、それが爛熟に達するのと表裏一体の関係で必然的に抱えこまなければならない袋小路的な状況を指摘し、それに対処する視点として田舎の発見を具体化したものである。開府以来長年月をかけて形成さ

れた江戸人の鋭敏な美意識は、過度の洗練に到達したことで引換えに、その発想は型に嵌まった固定化から自由ではなくなる。文化が成熟の極に達すると同時に避けがたい悪しき形式主義の跋扈である。そして、「江戸趣味」を体現した典型である「通人」の美的感性や過敏な神経質は、生活そのものから遊離した享楽主義という病弊に転落する。

藤村の見るところによると、「江戸趣味」の弱点は、「精神の発揚」を失った活力の枯渇であり、「深い洞察の力」を働かせて「生活といふものゝ真面目な意味」を問うことを忘れた文化的衰弱現象であったのである。

その克服のために唱えられた「野暮な田舎趣味」が必要な理由は、傍点部②の「生存競争の烈しい世の中」という時代情勢についての判断が関係している。ハーバート・スペンサーの社会進化論の流入によって明治期全般を風靡することになった「生存競争」という語句は、明治期の人々にとって、社会は優勝劣敗・適者生存によって再編成されていくという脅迫観念的な指導理論と同義であった。新時代を支配する「生存競争」下に置かれた藤村に必要なことを言えば、虚飾を排し生きることの基盤である生活の意義を問い直すことであつたろう。文化の洗練が、享楽主義によって生活の意味を喪失させるというジレンマが避けられないならば、それを更新するためには別の生活原理が要請されなければならない。それが「懶惰になり易い」都会に

対して提唱された「田舎趣味」であり、質実を旨とする「簡素」という生活信条であった。

藤村は「簡素」という標語を生涯の座右の銘にした人である。この時期、同様の危機感を持った人間は藤村一人ではなかった。傍点部②にある「簡易生活」の語句は、上司小剣が主宰した雑誌「簡易生活」（明39・11・1創刊）を念頭に置いたものである。同時に、虚飾・虚礼に流れる形式主義を排する雑誌「簡易生活」を創刊する機縁ともなったフランスの改革派の牧師シャルル・ヴァグネル（1852～1918）の著書 *La vie simple*（1895年）が、中村嘉壽訳『單純生活』（中庸堂書店 明38・12）、布施知足訳『簡易生活』（東西社 明39・2）によって紹介され、広く読まれていた事情を意識した発言でもあろう。藤村がヴァグネルの著作を読んでいた確証は得られない。しかし、布施知足の翻訳は *The Simple Life*（1901年）からの重訳であるが、「歓楽の時、活動の時」にある「簡易生活」の語句に「シンブルライフ」のルビが振られていることは、藤村がヴァグネルの著作名を意識していた傍証になるであろう。さらに、ヴァグネルがヨーロッパの社会・階級・人心を問わず蔓延している道義の頹廃について、「簡素」という倫理的命題から切り込んだ主張との内的な関連性は、以下のような資料から裏付けられよう。錯綜する複雑な社会から本質を掴み出す要諦について説いた「吾儕は常に単

純なる心を持ちたい。そして複雑なるこの世を味ひ知りた
いと思ふ。」「(「単純なる心」、『新片町より』所収)という
文章において、藤村は、社会や人生に対して予断に汚され
ない質実な思考を第一義に挙げる態度を説いているからで
ある。「ワグネル(Wagner)の著『単純生活』は、複雑なる社会に処

して、単純なる生活を営み、剛健なる気象を以つて、浮華
なる俗流と戦ふことを教へたるもの」(上司小剣「簡易生
活主義」)「簡易生活」第一号、明39・11)という主張と
類似した考えに立っていたことが伺える。さらに「芸術に
於いて『簡素』の重んじなければならぬやうに、学問に
於いても肝要なことは、この『簡素』を重んずるといふこ
とでありませう。」「(帝国大学の文科)、「太陽」明42・12)
『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。』
これは私が都会の空気の中から脱け出して、あの山国へ行
つた時の心であつた。」「(『千曲川のスケッチ』序、佐久良
書房 大元・12)など、簡素の意義を人生のみならず文学・
学問にまで適用しようとする資料を付け加えることができる
からである。すでに藤村には、前記の神津猛宛書簡で
「いづこに行くも田舎生活に満足し、簡素にしてこと足る
やう心懸け居候。」と述べ、著作生活をより堅固にするた
めに、虚栄を遠ざけようとする警戒意識が顕著であつた。
雑誌「簡易生活」創刊以前に自覚的な覚悟であつたことを
証明する。「江戸趣味と田舎趣味」の傍点部②において、

「近頃は、『簡易生活』などといふ声をしきりに耳にするや
うになりました。」という例示の仕方は、我が意を得たり、
というよりも、自説が上司小剣より早かつたことを自負し
た書き方であつたろう。

ところで、「江戸趣味と田舎趣味」の傍点部①にある
「山の手の田舎趣味」という語句は、以下詳述されること
なく、「歓楽の時、活動の時」において完全に消失した規
定である。「江戸趣味と田舎趣味」では、傍点部③におい
て、都会に近接する利点を生かして生活物資を供給する生
産地と、固有の歴史を有する独立した地方の二種類に分け
ている。しかし、このような二分法は、浅草区へ転居した
直後の「文学談」「寒き口唇」には見出せない。この時点
の藤村の認識では、西大久保は東京区外の「片田舎」(前
記「寒き口唇」)であり、都会の消費システムに従属した
地域という認識はまだ明確ではなかつたのである。このこ
とは、小諸と西大久保の農業従事者の間に決定的な差異を
見出していなかつたことを意味する。しかし、東京の山の
手は急速な都市化に吞み込まれ、市街地に一変する。その
結果、あえて下町と比較する地域としての意味を失ってい
るという判断が生じたのであろう。例えば、後年の資料で
あるが、西大久保の農民について「純粋に独立した農夫と
いふよりも寧ろ都会に向つて野菜を供給する人達——言はゞ
野菜作りといふ方に近いことが分つて来た。(中略)大き

な都会を控へて万事倚り凭ることの出来る近郊の農夫は、それだけ物を握む力を弱められて居る。」「(甲武線)、「新潮」大2・3」という理解が明確化していき、「山の手の田舎趣味」という規定の有効性に疑問を持つに到ったことが考えられる。つまり、「江戸趣味と田舎趣味」の傍点部③において藤村が農村を二分割して論じようとした理由は、郊外に位置する西大久保が「独立した地方の精神」を有する田舎ではなく、都会の消費経済に左右される従属的空間であることに気付かされたため、純然たる地方に着目して、都会との比較論を展開する考え方へ転換したのである。小諸から東京郊外の西大久保へ移住し、そして雑踏を極める繁華な浅草区新片町へ転居した時間は、田舎から東京郊外の新開地を経て、徐々に市中に向かって移動する過程である。外(小諸)から内(浅草)に向かって生活の場を同心円上に移動した生活は、都市を田舎の視点から客観化し、同時に居住地の移動は小諸への意味付けを可能にする認識の相互作用が進行したのである。小諸時代に農村・農民への関心が発生したことは明白な事柄であるが、それは新片町時代に明確化した批評精神の原型を作るものであったと考える方がよい。新片町移住後、時間・空間的距離を確保した藤村は、都市に居住する生活者の自我意識を根本的契機にしなが、過去の体験に強い意味付けを行うことによって、「田舎」の発見に到達したのである。

ところで、傍点部④の都会の空氣が「懶惰になり易く、その反対に田舎の人間が「能く働くから、随つて氣象も剛健である」という説明は、どう理解したらいいのか。消費的な娯楽において豊かな「歓楽」を叶えるのが都会の特徴であるとすると、農村の生活形態は、所与の自然から「生活材料」を得るために、自らの創意と努力を傾ける「活動」が基本にならざるをえない。興味深いのは、「能く働くから、随つて氣象も剛健である」という表現に明らかのように、藤村が、労働という行為と人間の精神・生命との不可分の相互交渉を主張しようとしていることである。この点に関しては、トルストイ、ゲーテ、カーライルらの思想的媒介によって確立した藤村の「労働神聖観」という觀念と、それが藤村の文学にどのように発現しているかについて論及した笹淵友一氏の論文が有益な示唆を与えてくれる。笹淵氏は周到な比較文学的検証をもとに、「藤村にとって生活は即ち労働であり、そして労働は内的生命の根柢である」という認識がある。」と論じている。藤村は、「働く」という直接的行為の意義について、人間の内的生命の更生に不可欠なものであると認識していたのである。そういえば、『海へ』(実業之日本社 大7・7)の箴言風のエピソードに、「心を起さうと思はゞ先づ身を起せ」という文章があるが、藤村は、自然を相手に営まれる農民の生活は、「身を起」こすという肉体の活動と、人間の「心」の更生の相

互交渉が典型化されたものと考えていたのである。「江戸趣味と田舎趣味」の趣旨を継承した「歓楽の時、活動の時」が「活動」を明示した題名になった理由も、上記のような理解で解釈出来よう。

(三)

次に「江戸趣味と田舎趣味」の四カ月後に発表された小説「並木」を取りあげ、都市生活の弱点を田舎から照射しようとする批判意識が、どのように創作に定着されようとしていたかについて検討してみたい。小説「並木」は、明治の初期浪漫主義を招来させた同人雑誌「文学界」(明治26・1・31・1)に結集した青年群像の夢と悶えを描いた長編小説『春』の前奏曲的作品として位置づけられている。また、発表後、作中の相川・原に擬せられた友人馬場孤蝶・戸川秋骨から容赦のない批判を浴びせられ、いわゆるモデル問題を沸騰させたことでも有名である。『春』のモチーフを先取りする慎重な瀬踏みであった「並木」については、作品研究以外でも、モデル問題が『春』の構想・描写法にどのような影響を及ぼしたかなど、その論点は広範囲に互っている。しかし、明治四十年四月三十日付林勇宛書簡で「『並木』は小生が最近の詩境に有之候。」と創作を自負した意図について、「江戸趣味と田舎趣味」の趣旨との関連から検討することは行われていないと思われる。当然、テ

キストは、孤蝶らの不興を買ったことに苦慮し、友人の反発に屈して削除・改訂した『藤村集』(博文館 明42・12)の本文ではなく、「文芸倶楽部」の初出文で読まなければならない。

「十年間の辛酸」を経て東京に結集する旧友再会物語である「並木」は、二部構成で展開する。「官省のやうな大組織」の会社に勤務する相川が、金沢の高等学校を辞職し東京に居を移そうとする原の訪問をきっかけにして、空しく月日を重ねた腰弁生涯の現状を痛感させられる前半部と、翌日相川が原を日比谷公園に誘い「市区改正」の最中にある激変して止まない東京を背景に、都市居住者が直面する危機意識に「覚醒」する後半部で成り立っている。前半部に基調的なモチーフは、相川が久し振りに再会した友人原の年寄染みた風貌に驚き、歳月の経過に今昔の感を深くすることからも明らかのように、青春の時期がすでに遠い過去になった苦い喪失感である。原と別れた夜、相川が「人は何事にも或事を成さば可なりと信ず。(中略)されど未だ見出し得ず。」と記した若き日の文章を読み返す件がある。その結果、相川は、いまだに事志を得ない自分の現状への痛恨の思いを自覚させられることになる。翌日、相川の中に生まれた苦い現状認識は、原と日比谷公園内を散策する場面において、大きな展開を示すことになる。氣質も違えば、都会と田舎で別々の人生を歩んで来た二人の考

え方は、基本的なところで擦れ違っていく。流行を競いあう派手な風俗に村夫子的な違和感を隠そうとしない原と、それを長く田舎に居過ぎたせいであると憐れんでいる相川との間で、認識の葛藤が展開していく。金沢で「八年間の田園生活」をしてきた原は、これから構えようとする新居について、「角筈か千駄木あたりの郊外生活を夢みて居る」人間である。それは、「八年の間、百姓のやうに自然な暮しをした」体験を踏まえた明確な判断が打ち出されているのであって、原は単なる趣味談義に浮かれているわけではない。ちなみに、旧友の動向について言及したなかで興味深いのは、相川が自ら企てている「会」の活動に冷淡な高瀬に対して非難の口吻を洩らしていることから明らかにだが、高瀬の非同調的な意向が強く感じとれることである。そうすると、原より一足早く上京し、すでに「新進作家」の呼び声の高い高瀬について、「山の中から出て来た」と書かれた表現は、金沢から東京に移住しようとしている原と関連づけて考えるべきであろう。この表現を参照するならば、「並木」には、原を筆頭に、地方から上京した高瀬を配置することによって、田舎の視点から都会生活者を批評しようとする作意が顕著なのである。原が相川に対して、「市中には事業があつても生活が無い、生活のあるのは郊外だ」と言明したのは、事業に執心するあまり、無為な日常に自虐と焦慮を募らしている相川の現状を痛烈に暴露し

たことになるのである。この断定には、生の目的が生計の手段に埋没していく都会生活者への批評足りえている。「田園生活」で得た「自然な暮し」の意義に執心する原の造型は、都会を批評する藤村の志向性が仮託されていたのである。

ところで、前記の「江戸趣味と田舎趣味」の傍点部⑤で「市区改正の実行」等によって激変して止まない「新東京」の動揺と混雑に言及した件は、「並木」の重要な時代背景になっている。「江戸趣味と田舎趣味」の発端に位置する「文学談」「寒き口唇」で、下町から山の手に拠点を移そうとしている文明の趨勢について、「火事場」の語句を使った比喩表現が行われていた。これが、日比谷公園に向かう車中と二人が別れる直前の場面に二度試みられている。原の目には、「市区改正」中の市街の建築物が、その斬新さと壮麗さで従来の形式を圧倒するかの如くに映る。それに続いて次のような描写がある。「八月の日の光は窓の外に満ちて、家々の屋根と緑葉とに映り輝いて、この東京の都を壮んに燃えるやうに見せた。」最も典型的な箇所は、二人が混雑した往来を眺めながら、古いものを打破していく大都会の変遷について「熾んに燃えて居る火と、煙と、人」とに満された其火事場の凄じい雑踏を思ひ起させる。」と述べられた箇所である。この二回に互る表現は、「並木」が社会の種々相で繰り広げられる新旧の大変革期を背景に

した都市論的テーマを持ち、そこに生きる人間の中に問題を見出そうとした作品であったことを明示している。そうすると、繰り返し「田舎」や「郊外」に「自然な暮らし」という視点からこだわり続ける原が、「革命の最中」のような東京の変化について「内部」も同様なものであろうかと懷疑しているのは、藤村の文明批評の方向性を示していたことになる。藤村は、『春』の構想の具体化に伴って、北村透谷が物質的開化によって精神を奪われようとする「移動の時代」（『漫罵』、『文学界』明26・10）について、痛烈に批評した文明批判に同調しながらも、地方の農民を、労働と人間の精神の更生との相互交渉が典型化された存在であると感じながら、都市文明の問題に向き合おうとしていたのである。

原と別れた後、相川は友人との交歓から逆に手厳しく批評されたと言える。原を憐れ笑った相川は、都会での活動が生計の維持に自己目的化されている自家の現状について、痛烈な自覚に達することになる。それは、「官省のやうな大組織」に呑み込まれている相川が、結末において「官省」の退庁時の家路につこうとする「腰弁」の群れに遭遇する設定からも明らかである。その時、前日の焦燥に費やされたやうな自己認識は、門下生青木が「同じやうな高さに揃へられて、枝も何も切られて了つて、各自の特色を出すことも出来ない」お堀端の柳の「並木」に擬した冗語を一変

させ、創意と個性を奪われ凡庸化されていく都市居住者についての「覚醒」にまで凝縮されようとしていたのである。「並木」の主題は、相川の中で意識化された悔恨の思いが、結末の「覚醒」にまで認識を深化させられる過程に具現化されていると言えるのである。

小諸時代に自覚的になった農村への関心は、過去の生活史を客観化することになった浅草区新片町への転居を重大な契機にし、「江戸趣味と田舎趣味」において、都会を批評する基盤としての農村の意義を、精神の更生と労働の相互交渉という観点から理念的に明確化させるまでになった。それは、小説「並木」を検討したことで明らかのように、明治四十年代の転換期を生きる都市居住者の問題と関連づけられ、藤村の文明批評の重要な側面を具体化することになっているのである。今後の課題は、『家』等の創作が、このような批評精神とどのように関連しているかについて検討しなければならない。

注

- (1) 拙稿「文明批評家藤村の側面——大正期における農村回帰の志向性をめぐって——」（平岡敏夫・剣持武彦編『島崎藤村 文明批評と詩と小説と』双文社出版 平8・10）

- (2) 松永伍一『日本農民詩史』（法政大学出版局 昭42・10）上巻第一編第五章「島崎藤村の農民性」

(3) 明治三十九年十月十六日付書簡にある「田舎生活」の宣言は、その直前の十月八日付神津猛宛書簡で「こゝで田舎生活を送りたいと思つて居ります。」と表明していたことについて具体的に述べたものである。

(4) 『近代文学研究叢書第五十一巻』(昭和女子大学近代文学研究室 昭55・11)の島崎藤村の「著作年表」(稻吉智恵子)は、筑摩書房版『藤村全集』別巻(昭46・5)の「著作年表」に、その後の調査結果を付け加えたものである。「歓楽の時、活動の時」が明治四十二年八月の雑誌「中学世界」に掲載されていることを増補している。かくいうわたしも、『作家の自伝42 島崎藤村』(日本図書センター 平9・4)において、『新片町より』所収文は、「学生タイムス」に掲載された「江戸趣味と田舎趣味」を大幅に加筆したものである、と解説し誤りを犯していた。ここに訂正する。なお、薮禎子「藤村と東京」(『藤女子大 国文学雑誌』50、平5・3)は、「文学談」から「歓楽の時、活動の時」までの資料を概観し、藤村の「下町文化論は、そのまま都市論更には日本の近代文明論として独自の意義をもつてくるように思われる。」と評している。しかし、薮論文は筑摩書房版『藤村全集』に拠っているため、「学生タイムス」掲載の本文について未検討であるのが難点である。

(5) 小木新造「山の手の変貌」(『文学』昭60・11)

(6) ヴァグネルの著作と上司小剣が「簡易生活」を創刊するに到った関係については、すでに紅野敏郎「上司小剣——『簡易生活』前

後——」(『武蔵野ペン』7、昭37・12)に言及がある。

(7) 笹淵友一「島崎藤村における『労働と文学』——藤村の労働神聖観とその軌跡——」(片野哲郎編『比較文化の試み』所収、研究社 昭52・10)

(8) 「並木」が、正宗白鳥の短編「塵埃」(「趣味」明40・2)に影響されていることについては、すでに水本精一郎「島崎藤村『並木』解説」(『近代の短編小説(明治篇)』九州大学出版会 昭61・10)に的確な考察が行われている。「並木」に投影した「塵埃」のモチーフがいかに大きかったかは、冒頭の「埃塵深い巷」で煩悶を深める相川と、結末の「塵埃だらけに成った腰弁」の表現が呼応させられていることでも一目瞭然としている。意地も張りもなく、なし崩し的に「枯木的人間」に化した「塵埃」の老校正係小野道吉の姿は、「並木」の「片輪（カマ）の人に成つて行く」腰弁の運命と同質であることも動かしがたい。

付記 ヴァグネルの著作については、大塚幸男『簡素な生活——一つの幸福論』(白水社 昭28・9)の訳文も参照した。

(うりゅう きよし・本学教授)